

風姿花伝第三、問答条々 八 萎れたる風情

問。常の批判ひはんにも、萎しほれた
ると申事まうすことあり。如何いか様やうなる
所ぞや。

答。これ殊ことに記しるすに及およばず。
その風情ふぜいあらはれまじ。さりな
がら、正ただしく、萎しほれたる

〔口訳〕 問。普通の場合の芸評に於ても、「し
ほれてゐる」といふ批評の言を聞くこ
とがあります。一体「しほれる」とい
ふのは、どんな所をさすものでありま
すか。

答。このしほれるといふ事は、言葉
で示すといふ事は殊に不可能事であ
る。又よし説明しても、しほれたる風
情といふものは、あらはれるものでは
ないと思ふ。しかし、正まさしくしほれた

風体は有る物なり。これも
唯、花によりての風情なり。
能々案じて見るに、稽古
にも、振る舞いにも及がた
し。花を究めたらば知るべ
きか。されば、普く物真似
毎に無しとも、一方の花を

風体といふものはあるものなのだ。が、
これもただ、芸能の花といふものに因
つて生ずる風情なのである。よくよく
考へて見るに、このしほれは、稽古で
得られるものでもなく、又振舞ひの仕
方によつて生ずるものでもない。結局、
芸能の花といふものを究め尽したなら
ば、これを自覚し自知する事が出来よ
うかと思ふ。それで、すべての物真似
に於て、何れも花を究めたといふ迄に
到らなくとも、どれか一方面に於て花
を究め尽した人なら、しほれたる所
を自得する事もあらう。だから、この

究めたらん人は、萎れたる
所をも知る事あるべし。然
ば、この萎れたると申事、
花よりも尚上の事にも申つ
べし。但し、花無くては萎
れ所無役なり。されば湿り
たるに成るべし。花の萎れ

しほれてゐるといふ事は、花といふも
のよりも更に一層上位のことだと言つ
ても良いかと思ふ。しかし注意すべき
は、花がなくてはしほれて見たとて何
の役にも立たない。花のないしほれは
真のしほれでなくて、しめりたるもの
といふべきである。美しい花がしほれ
た風情こそ面白いが、花も咲いてゐな
い木がしほれたとて、何の風情があら
う。かやうな次第で、花を究めるとい
ふ事が既に此道の者にとつて一大事だ
あるのに、その更に上位のものともい
ふべき事であるから、しほれたる風情

たらんこそ面白けれ。花咲さ

かぬ草木の萎れたらんは、しほ

何か面白かるべき。されば、なに

花を究めん事、一大事なるはな きわ

に、その上とも申べき事なうへ

れば、萎れたる風体、返々しほ かへすく

大事也。さる程に辞にも申ことば

がたし。古哥云、こかにいふ

薄霧の籬の花の朝しめりうすぎり まがき

秋は夕べと誰か言ひけむゆふ

かやうなる風体にてや有るあ

べき。心中に当て、公案すあ こうあん

べし。

といふことは、かへすがへすも大事である。それで、かやうな事は言葉では言ひ得るものではない。古歌に

*うす霧のまがきの花の朝しめり秋は夕と誰かいひけむ

といふ歌がある。しほれといふのは、この歌によまれたやうな風体をいふものであらうか。千思万慮の工夫をつくして見る事が大切である。

この花伝書第三問答条々は、花を説く事が眼目である。その花の最後に、しほれたる風情を加へて、「花よりもなほ上のことにも申しつべし」といつて居る所を見ると、この条を書いた世阿弥には、ただ幽玄な花だけでは満足しきれないで、その花にやや萎れを持つた風情の特殊な魅力をも、心がけて居た事がうかがはれる。花から萎れへの線を、遙かに延長する時、我々は花鏡にのべられて居る「さび」や「ひえたる」ものの存在を、そこに感じるのである。妖艶から幽艶へ、それから淡々たる美しさへ、更に進んで寂びにまで進むのは、東洋芸術の一特色である。

世阿弥は萎れの基体を花に置いてゐる。「花がなくては萎れでない、それはしめりたるものに過ぎない」といふ一語は、実に周到的な注意で、千鈞の重味がある。若し稽古や振舞で萎れを求める者があるならば、それこそしめりを得るだけにならう。ここが芸能のむづかしい所であり、又味のある所である。位が進めばおのづから自得せられるが、その位に到らないものには、求めては怪我を招くのみである。

萎れは口では説明し難い。ただ直感するだけである。海棠の雨を帯びた風情だとか、李花一枝雨を帯ぶとか、良き女のなやめる所あるに

似たりとか、さまざまこれを譬へるべきものがある。が、美人がなやめる所あつてこそ美しいが、美人ならぬ者が西施の顰にならつても、それは結局うたて興ざめたるものに終る。で結局、花が何としても大切だといふ所に落ちつくわけである。

*うすぎりの——この歌は藤原清輔の作で、新古今集に採られた名歌である。籬の花が薄霧に包まれて色もややほのかに、しつとりとした朝しめりの風情で咲いてゐる。それを見ると、「秋のあはれは夕こそ勝れ」といつたのは誰なのか、この朝の秋の光景こそ、夕べにもまさつてゐるではないかと、思はずもいひ度い衝動にかられるといふ意である。